村上亨教授のご業績について

橋本 圭司

村上亨教授が、2025年３月をもってご退職されることになりました。長年にわたって経済学部でのリーダーシップをとってご活躍された先生のご退職は残念至極でありますが、ここにご厚情をいただいた同僚の一人として若干の思いを述べさせていただきます。

先生は、1998年に本学経済学部教授として着任以来、研究面においては、「経済政策」分野、とりわけ「産業組織論」の領域において顕著な研究成果を発表されています。教育面では、誠実なお人柄から学部学生のみならず多くの大学院生に向けて真摯に学生指導にあたり、大学の原点たる教育、研究での任務遂行において追手門学院大学の発展に多大な力を発揮されました。大学運営業務においても、学生部長、経済学部長、学長補佐、特任副学長、図書館長、副学長、基盤教育機構長、教務部長、大学院長、成熟社会研究所所長などの要職を歴任され、本学の発展に大きく貢献されました。ここに謹んで、終始変わらず先生のお振舞いから醸し出されるやさしいお人柄でもって接していただいたことへの感謝とともに、本学およびわが経済学部に対しての、先生のご貢献について振り返らせていただきます。

まず、研究活動に関する業績でありますが、先生は、中央大学大学院経済学研究科博士後期課程終了時の1985年に学位請求論文「産業組織と公共政策―競争メカニズムの分析と評価―」により、同大学より経済学博士の学位を取得されております。その後、星稜短期大学、京都学園大学での勤務を経た後、1998年に追手門学院大学経済学部に就任し、その間、学内外に多くの研究成果を発表されています。

先生の研究のご関心は、産業組織およびそこから発生する経済政策の諸問題でありますが、そこでは学問研究者として考慮、思案すべき、理論と実証の有機的な結びつきの確認という作業が必要不可欠となります。先生の一連の研究業績は、まさにそこでの知的戦いの軌跡をなしており、『京阪神都市圏における経済のグローバリズムとリージョナリズム』（1993）その他の実

証研究ないし実地調査、『ポスト産業資本主義下の制度改革』（2006）をはじめとする今日の資本主義社会の在り方への理論的分析あるいは問題提起などの研究成果を、同学の士たちとの共同研究の成果として著すとともに、その後のいわゆる「幸福の経済学」をはじめとする、経済学の根底を見直そうとする先生の研究遍歴は、そのような知的挑戦の現れということができるでしょう。経済学では、遠くその学問体系の成立時から今日に至るまで、いわゆる「政治経済学」から「経済学」への進展あるいは変遷を繰り返してきているわけですが、経済学が拠って立つところの根源的問題意識は、たとえばA.マーシャルが言うように「人間の研究」に尽きるということもできるでしょう。村上亨先生の研究の関心の根源には、そのような問題意識が内在しており、ともすれば、今日の経済学の現状からは、「人間研究」の視点が半ば軽んじられている感がありますが、先生の一連の研究成果および研究への取組み姿勢は、若い研究者たちへの貴重な示唆が含まれていると思われます。

また、教育面においては、本学着任以来、「産業組織論」や「経済政策」などの主要専門科目の他、３、４年生の専門ゼミおよび初年次の入門諸科目を担当して、現実経済の捉え方とそこでの経済理論での論理的思考の意義について丁寧な授業運営を行いました。大学院では「経済政策研究」や「研究演習」の他、「経済史」、「経営学」なども担当され、その研究領域の広さに驚かされるのですが、毎年多くの院生指導に腐心され、修士論文の指導に従事されました。先生のやさしく丁寧な語り口調は、多くの学生の信頼を得て多数の演習志望者を集める人気ゼミとなる要因であり、それは留学生を含めた研究演習を志望する大学院生の指導についても同様でありました。経済学入門者に向けてと同様に専門的かつ高度な経済学の内容を、それぞれ多様な学生に教示する村上氏の真摯な教育姿勢は、研究者として学問に立ち向かう姿勢に裏打ちされたものであり、氏のゼミで鍛えられた多くの卒業生、修了生が社会で活躍していることを考え合わせても、教育面での貢献が大であることは明らかでありましょう。

加えて村上亨先生には、大学行政に関する多大の貢献があります。経済学部構成員として、教務委員、学生支援委員その他学部を代表する各担当委員としてそれぞれの業務に従事するとともに、大学運営としては、学生部長、

経済学部長、学長補佐、特任副学長、図書館長、副学長、基盤教育機構長、教務部長、大学院長、成熟社会研究所所長などの要職を歴任された他、「大学50年志編纂小委員会」の委員長も務め、先生を慕う多くの学生、大学院生への指導と並行して、同僚教員、事務職の方々の信頼を集め、各要職で果敢なリーダーシップを発揮し本学発展のために貢献した業績はきわめて大きいといえましょう。同時に、研究、教育、大学運営という根源的な義務果たす大学人、職業人としての基礎となる、われわれの職場での福利厚生の向上に向けての活動についても終始リーダーシップを発揮して大きな貢献をされました事も付け加えさせていただきたいと思います。

以上、村上亨先生のご退職にあたり、言葉足らずながら、先生の追手門学院大学経済学部でのご貢献を振り返るとともに、今後のいっそうのご健勝とご活躍をお祈りしたいと思います。先生は「幸福の経済学」を体系化したいとの問題意識をお持ちと聞いております。ますます、より高い問題意識と見識であわせて私ども後進への変わらないご指導をお願いするものであります。